〔最終講義〕

『出会い』とわたくしのアルフレッド・シュッツ研究

佐藤　嘉一*

ただいま木田学部長からたいへんなお褒めの言葉をいただいて恐縮しております。有難うございました。本日はまた教室の中に卒業生の懐かしいお顔をたくさんお見受けします。遠方から皆さん，忙しい時間を割いてわざわざ駆けつけてくださいました。とても嬉しいです。本当にありがとう。心からお礼を申し上げます。そしてこの最終講義のためにいろいろとご準備下さった学部の教職員の皆さんにもお礼を申し上げます。それから明日から学期末試験が始まる学生や院生諸君にも，来聴多謝です。

【Ⅰ】テーマと動機と方法

最初に，本日の講義のテーマ「『出会い』とわたくしのアルフレッド・シュッツ研究」についてその趣意を簡単に述べることにします。

『Ａ・シュッツ＝Ｔ・パーソンズ往復書簡』（1976）と『Ａ・シュッツ＝Ａ・グールヴィッチ往復書簡1939-1959』（1985）という２つの往復書簡があります。この２つの往復書簡をわたくしは大分以前に翻訳しましたが，それは全くの偶然の「出会い」によるものでした。そしてこの出会いがなければわたくしのアルフレッド・シュッツの翻訳の仕事もささやかなシュッツ研究もなかったであろうと思っています。これが本日述べてみたい要点の１つです。

もう１つの要点ですが，1940年代にこの２つの往復書簡が書かれていることに着目して，1940年代におけるアルフレッド・シュッツの生活と学問を見直してみたいということです。アルフレッド・シュッツとタルコット・パーソンズは，ご承知のとおり，社会学史において後者は「構造機能主義の理論」の提唱者，前者は「現象学的社会学」の提唱者として知られていますが，２人の社会学理論の違いをめぐってこれまでいろいろと論じられてきました。わたくしもこの点について発言しております。しかし最近になってようやく気づいたのですが，シュッツとパーソンズの「理論的世界」を1940年代の時代状況に位置づけて考えるという――「生活史的アプローチ」としては当たり前の，しかし大事な――論点をわたくしなどは長い間見すごしてきたということです。

＊立命館大学産業社会学部教授，2003年４月より立命館大学特別任用教授，名誉教授

さて，レジュメにある‘To really understand you must go back and back and back’という表現，これはタルコット・パーソンズのことばです。「事態を本当に理解するためには３度後戻りしなければならない」。この「３度後戻りする」の意味ですが，ひとつの研究が完成に至るまでにだれもがたどる「道行」の３段階のことであると解釈できないでしょうか。すなわち研究の出発の段階「点としての研究」，次に研究の発展の段階――点と点が結びついて「線となる研究」――そして研究の完成の段階，線と線が結びついて「面となる研究」です。研究のはじめはだれもが星雲状態です。そこから１つの星を見つける，星に導かれて研究を進める，最後にこれを具体的な姿に結晶化する。ことばに表せば簡単ですが，この道程を歩みきることは意外に時間がかかり，相当に根気が要ることです。なにか脱俗性といったものが求められるのではないでしょうか。

それから運もある。レジュメにあるもう１つのことば‘counterfactual conditional’［反事実的条件づけの推論］。これはカール・ポパー『探求の論理』（Karl Popper, *Logik der Forschung* 1971）のうちに典拠をもつ推論の１形式を意味しますが，事態を仮定法的に「もしそのような出来事が起きなかったとすれば，事態はどのようになったであろうか：そのような事態にはならなかったであろう」［実際にその出来事が起きてしまったので事態はそのようになった］と。このように実際の事実とは反対の条件を設定して，その出来事がはたしてその事態の直接原因となったかどうかを議論する推論の仕方を意味します。研究がうまくいくには出来事の〈コンテンゲンツ〉つまり運も「つき」もあるということです。

この２つのことばを本日のテーマの軸に据えて――「もしその出会いがなかったとすれば，私のシュッツ研究はなかったであろう」という‘counterfactual conditional’を試みながら「３度後戻りする」というやり方で――わたくしにおけるシュッツ研究の「現在」をその過去と未来の間において振り返る，有り体にいえば，わたくしのシュッツ研究の現在はこういうことなのだと「申し開きする」ことです。

【2】２つの書物・２つの往復書簡・２つのバイオグラフィイ

「自分史」との関わり。このことを考える場合，レジュメに掲げた２つの書物，２つの往復書簡そして２つのBiographyについて触れなければなりません。私のシュッツ研究のランドマーク，境界標識です。このランドマークに沿ってわたくしの研究はぐるぐる回ってきた感じがします。

即ち：

Ａ）Alfred Schütz(1932), *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt; Einführung in die verstehende Soziologie*, Wien［佐藤嘉一訳（1982）『社会的世界の意味構成』木鐸社］

Ｂ）Talcott Parsons (1937), *Structure of Social Action*, New York［稲上・厚東他訳（1976-89）『社会的行為の構造――特に最近のヨーロッパの著者グループに関連した社会理論に関する一研究――』Ⅰ～Ⅴ木鐸社

Ｃ）Alfred Schütz & Talcott Parsons(1977), *Ein Briefwechsel ; Zur Theorie soziales Handelns*, hrsg. W.M.Sprondel, Frankfurt am Mein［佐藤嘉一訳（1980）『Ａ．シュッツ／Ｔ．パーソンズ往復書簡：社会理論の構成』木鐸社］

D）Richard Grathoff, hrsg.(1985), *Alfred Schütz & Aron Gurwitsch Briefwechsel*, München.［佐藤嘉一訳（1996）『亡命の哲学者たち　アルフレド・シュッツ／アロン・グールヴィッチ往復書簡1939-1959』木鐸社］

E）Hermut Wagner(1983), *Alfred Schutz, An Intellectual Biography*, Chicago

F）Uta Gerhardt (2002), *Talcott Parsons, An Intellectual Biography*, Cambridge

２－１－１　同時代人として

私のアルフレッド・シュッツ研究はきわめて不確かな出発点からはじまり，さしたる展望もないままに研究に取りかかりました。きちんとした方法論と明確な目的意識のもとにシュッツ研究をはじめたのではないということです。ある時偶然に出会って，それを機縁にして研究をはじめたのです。この点について以下述べます。

アルフレッド・シュッツとわたくしの間に40歳の違いがあります。わたくしが生まれて成人するまでの20年間（1938-1958）は，シュッツにとって40歳から60歳（1939-1960）の期間に相当し，還暦の年にかれは心臓発作でこの世を去ります。人生の春から夏を迎えるものと秋のみのりの季節を終えて人生の最後の時に臨むものという関係になります。つまり親世代と子世代の違いですが，20世紀の前半20年を少なくともともに生きたという勘定になります。コンテンポラリーズ，同時代人です。するとタルコット・パーソンズもアロン・グールヴィッチも同じ意味で同時代人であることになります。

シュッツやグールヴィッチそしてパーソンズに直接面会するチャンスはありませんでした。しかしシュッツ夫人とグールヴィッチ夫人には直接会って話を聴く幸運に恵まれました。「日本の皆さんによろしく」との両夫人からの励ましがなければ，シュッツ等の一連の研究は途中で挫折したであろうという部分があります。

1960年代～80年代，日本の社会科学の理論分野には優れた研究者が多数輩出し，満を持してそれぞれが論陣をはっていました。タルコット・パーソンズをはじめとするアメリカ社会学の諸学説がほぼ吸収され，戦後日本社会の構造や変動に関する研究が独自な形で開花する時代に入りました。マックス・ウェーバーやマルクスの社会理論に関する卓越した体系的な研究も矢継ぎ早に出版される一方，ドイツにおける社会科学の再興とともにハーバマスやルーマンといったビッグな社会理論が新たに台頭し，機能主義，批判的社会理論さらにはフランスの構造主義の潮流など，「理論」社会学の分野では最新学説が林立し大変な活況でした。百花斉放。なにを読んでも書いても「就職」できる時代でした。わたくしの場合は，このような周囲の旺盛な動きの中で「何を主眼にして自分の研究を組み立てたらいいのか」一向に目途が立たず，実のところ40歳くらいまで悶々とうち過ごすという状態でした。大学院での研究を終え，すでに大学の教壇に立ちながら，研究の面ではいまだ星雲状態にあったわけです。自分なりの研究を導く「星」がなかなか見つからなかったということです。研究の出発点を準備するのに長く時間がかかった，わたくしの場合は。

２－１－２　シュッツ社会学との出会い

周知のようにタルコット・パーソンズのSSA（*Structure of Social Action*［ランドマークB）］の略記）

の著書目録791頁にはSchütz, Alfred: *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, Julius Springer, 1932［ランドマークA）以下*SASW*と略記する］が文献として掲載されています。しかしこのシュッツの著作をパーソンズはあの大きな本の中で一行の引用もおこなっていません。なぜなのだろうとわたしはそのことに疑問をもちました。とても気になりました。1959年から60年ごろです。パーソンズのウェーバー論は，読んでいて気づいたのですが，アレキサンダー・フォン・シェルテングの書いたヴェーバー論（Alexander von Schelting, *Max Webers Wissenschaftslehre*, Tübingen, 1934）が素地になっています。*SSA*を読めばこれは明らかです。シェルテングを介した新カント学派の「価値哲学」が前提になっているウェーバー論です。1960年代以前にシュッツのいわゆる「現象学的」ヴェーバー論に着目する研究者は，わが国の場合パーソンズ研究者を含めてほとんどいなかった。日常生活の思惟とヴェーバーの「理念型」の関連でシュッツを問題にした青山秀夫［青山秀夫著『マックス・ヴェーバーの社会理論』岩波書店，1950］は例外的ケースであると思います。――ウィーンでの1930年代初頭における尾高朝雄とアルフレッド・シュッツの間の友情が広く世間に知られるようになったのは1980年代からです。この点についてはYoshikazu Sato, Tomoo Otaka and Alfred Schutz in the 1930's: Their Social Theory and Its Socio-Cultural Background, in:『立命館産業社会論集』第35巻第１号pp39-55.1999.ditto, Phenomenological Sociology in Japan; Past and Present, in: 『立命館産業社会論集』第35巻第２号pp.39-55,1999.および 久間都茂子『心の一隅に棲む異邦人』信山社，2001を参照されたい――。

1960年は「安保闘争」の最中でした。大学の研究室の雰囲気は，連日街頭に出て「デモ」行進に参加したり教室で集会を開いたり，政治的アクションの熱気に包まれていました。夏期休暇に入り，他の院生諸氏は農村調査などに出かけたのですが，わたくしは研究室に残留でした。マスター［修士課程］の１年（回）生のときでした。たまたま研究室に届いた「丸善」の『ブック・アナウンスメント』に目をやるとシュッツの*SASW*第２版刊行の広告が目に飛び込んできました。1932年の初版本からやがて30年になる本が再版されるというニュースですから，ほんとうかしらん？と半信半疑。気になっていた本が手に入るとばかり早速に注文しました。

大著*SASW*――シュッツの生前のただ１冊の書物であることをあとで知ったのですが――を取り寄せてはみましたが，当時のわたくしのドイツ語の力では歯が立たない本でした。学生時代にマックス・ウェーバーを家坂和之先生の手ほどきで少しばかり読みましたが，エドムント・フッサールなどの現象学の用語は全くお手上げで，和訳不能の専門語がたくさん本文に並んでいます。周囲のだれかに教わるわけにもいきません。アルフレッド・シュッツがだれにも注目されず，問題にされなかった時代です。タルコット・パーソンズの社会理論については周りの人々――恩師の故新明正道先生や佐藤勉氏など――から学びましたが。このことが「みんなの後塵を拝するより，だれも手をつけていないほうが面白い。少し囓ってみようか」とシュッツを読みはじめる１つのきっかけになりました。もっともその後さしたる進展もみられず，あっさり20年くらい過ぎてしまったわけですが。

わたくしのシュッツ研究の端緒となった出来事は以上のとおりです。丸善のブック・アナウンスメントとの「偶然」の出会いがなかったならば次の20年，40歳～60歳のわたくしのシュッツ研究はなかったのではないかと思います。

２－２－１　第２のGOING BACK

シュッツ研究の「第２のGOING BACK」のはなしになります。1978から1979年にかけてのことでした。パーソンズ研究者の佐藤勉氏から「『シュッツ＝パーソンズ往復書簡』［ランドマークC）］を翻訳しないか」という手紙［もしかしたら電話］が届きました。「文部省在外研究員として外国へ長期出張することになり，これを訳すことが難しくなった。君が適任だと思う」という文面でした。「いいですよ」と二つ返事でこれを引き受けました。１年ほどまえに英語版［Richard Grathoff ed., *The Theory of Social Action, The Correspondence of Alfred Schutz and Talcott Parsons*, Indiana, 1978］でこれを読んでいましたから，夏休みに入って半年もかからずに訳しおえました。わたくしにとって最初の翻訳の仕事です。本屋がびっくりして「そんなにはやくて大丈夫ですか」といいます。「まあ，ちょっと見てください」「いいでしょう」ということでトントン拍子にことが運びました。

ついでに*SASW*の翻訳出版のことにも触れます。『社会的世界の意味構成』という名称で知られておりますが，わたくしは院生の時代からわからないままにこれを繰り返し読み直し，日本社会学会などで発表したりし，講義の合間をみては少しずつ訳してきました。原稿を本屋にみせたら「私のところで出版させていただきます」ということでこれもトントン拍子でした。長い20年もの沈黙ののち，２冊の本はほぼ同じ時期に出版されたわけです。

ちょうどその頃にわたくしは金沢大学から立命館大学に参りました。1984年４月，新任教員の歓迎会の会場に「熱烈歓迎」の大きな張り紙に現木田学部長とわたくしの２人の名前が書き出され，花満開の大祝賀パーティーは懐かしい思い出です。そして19年が過ぎました。アッという間の出来事のような気がします。振り返ってみるといろいろな思いが過ぎります。

1980年代のわが国では「新しい社会学の到来」ということで「現象学的社会学」とか「エスノメソドロジー」とか「シンボリック相互作用」とか，いわゆるマイクロ・ソシオロジーが注目されてきました。「階級」「階層」「村落構造」「都市的生活様式」といったマクロな制度レヴェルの社会学的研究ではなく，状況のなかのパーソナルな「人」対「人」の関係，「人間」対「人間」の関係をきっちり分析するという新しい研究の流れです。

日本現象学・社会科学会が設立されたのもその頃でした。第１回設立総会が新潟で開かれた折にドイツ現象学・社会学会を代表してリチャード・グラートホフ（社会学）とベルンハルト・ヴァルデンフェルス（哲学）の両教授が来日しました。立命館大学ではグラートホフ氏を囲む小さなコロキアムをもつことができました。全く孤立した状況からはじめたわたくしの研究はいつの間にか新しい研究動向の中に融合して，40歳を過ぎてなにか自分の研究の「居場所らしいもの」が見つかった，研究の「点」が「線」になりつつあるという実感でした。

２－２－２　「在外研修」とシュッツ研究の広がり

1989年から１年間在外研修の機会が与えられました。かねがねドイツに行きたいと思っていましたから，うまい具合に前年度に来日したグラートホフ氏に客員研究員の招聘手続をお願いして，ビーレフェルトに参りました。「井の中の蛙」はドイツの新しい空気に触れてすべてが新鮮でした。ベ

ルリンの壁が崩壊したのもこの年です。

この1989年はアルフレッド・シュッツの生誕90周年でもありました。師匠のグラートホフ氏に導かれ，大西洋を飛んでニュースクール・フォア・ソーシャルリサーチ（ニューヨーク）で開かれたシュッツの記念シンポジュウムに参加しました。

――この写真はニューヨーク25ウエスト81番街にあるアルフレッド・シュッツ宅をその年の暮れに訪問したときのものです。右側がアルフレッド・シュッツ夫人です。真ん中がリチャード・グラートホフそしてわたくしです。グラートホフは客員教授として産業社会学部に半年お迎えしましたから，ここにはご存じの方がたもおられるでしょう。スイスのチューリヒで翌年の秋にアロン・グールヴィッチ夫人にも会うことができました。

1997年に再び在外研修のチャンスを得ました。不思議なことに，その時にもわたくしは幸運な「出会い」に恵まれました。ハイデルベルグ大学においてこの年タルコット・パーソンズ『社会的行為の構造』出版60年を祝うインターナショナル・シンポジウム［Internationales Wissenschaftsforum Heiderberg; A Legacy of ‘Verantwortungsethik’ : Talcott Parsons’s “*Structure of Social Action*” After Sixty Years, June26-27, 1997］が開催されたのです。60年前に書かれた１冊の本をめぐっての国際シンポジウムです。タルコット・パーソンズのご子息の出席と報告。エドワード・ティリアキアン，ブライアン・ターナー，バーナード・バーバー，ダニエル・ベル，アイゼンシュタット，ハンス・ヨアス，ルイス・コーザー，ジョン・オニール，Ｒ・ミュンヒなど著名なパーソンズ研究者がさまざまな角度から論を展開しておりました。日本の研究者は「蚊帳の外」でした。その折Uta Gerhardt女史にわたくしは出会っていたのです。*Talcott Parsons, An Intellectual Biography*［ランドマークＦ)］の著者ウタ・ゲルハルトさんです。残念ながら，彼女がパーソンズ研究者であることを知らず，一言も交わさずにハイデルベルグを去りました。いま思うと残念でなりません。出会いが研究に生かせなかったケースの一例です。

少し話を戻します。『シュッツ＝グールヴィッチ往復書簡』［ランドマークＤ)］について触れます。シュッツ夫人にニューヨークで面会して挨拶した際，夫人はわたくしにいいました。「あなたにとうとうお目にかかれましたね。本当に夫のことについては翻訳でお世話になりました。有り難う」と。別れしなにわたくしが「『シュッツ＝グールヴィッチ往復書簡』はきっと日本から翻訳出版されますよ」というと「どなたが訳されますか？」「わたくしが訳します」とその時つい口から出てしまったのです。言葉の災いというか，いわなきゃよかったのに（笑い)。

２－２－３　第３のGOING BACK？

この『シュッツ＝グールヴィッチ往復書簡――亡命の哲学者たち』［ランドマークＤ)］の出版と『パーソンズ＝シュッツ往復書簡』［ランドマークＣ)］のそれとの間に17年間の開きがあります。２

つの往復書簡はわたくしには気持ちのうえで別の時代の別のコンテキストの中で生きていました。長い間そのように錯覚していたのです。「偶然の出会い」から仕事をはじめるさいに陥りやすい落とし穴です。「陥穽」と申しましょうか，実際にはこの２つの往復書簡は同じ時期の同じ場所で同じ人の手によって複数の相手にたいして書かれた手紙でありました。たとえばシュッツは1940年11月15日パーソンズ宛に１通の手紙を書き，その翌日11月16日グールヴィッチ宛にもう１通の手紙を書いています。

ここに２つの往復書簡を本日持ってまいりました。同一の時期に書かれた２つの往復書簡であるというまったくもって単純な事実，これをはっきりと自覚するには，残念ながら，さらに時間がかかりました。これを同じ机の上に並べてそれぞれの往復書簡をはかりにかけてその重量を比較することが，今日までできてなかったのです。それに気がついたのは最近のことです。もっと早くこのことに気づいていたら，すごい学者になっていたと思いますが（笑い）。出来事のつながりを見つけえなかったのです。

その点でわたくしのシュッツ研究は「中途半端」にとどまっています。時間は待ってくれません。今このような情けない，スキャンダラスな事態についてわたくしは皆さんに申し開きしないといけない。ですが「ものはいいよう」ということもあります。ようやく「第３の後戻り」，ザ・サード・ゴーイング・バック，「面」としてのわたくしの「研究」がはじまりました，と。幸い，立命館にとどまるようにということですから，その間にこの仕事をやり遂げたいと思っています。

【３】２つの『往復書簡』から1940年代を読み直す

３－１－１　２つの“INTELLECTUAL BIOGRAPHY”

もう１つの「出会い」を少しだけ話さなければなりません。ヘルムート・ワーグナー先生［『アルフレッド・シュッツ――亡命哲学者の生涯』［ランドマークＥ）］などの著作，アルフレッド・シュッツの高弟の１人］との出会いがあり――といっても「手紙の交換」ですが――ある重大な仕事を先生から授かりました。ながくこの仕事を放置している間に先生は他界されてしまいました。負い目，不義理，「申し開き」できない失態です。わたくしのシュッツ研究上の「ランドマーク」としては１番重たいものです。

いろいろこれまで述べました。これらのことが１つになってある方向性をもったシュッツ研究が今やっと見えてきたという感じがします。シュッツ理論を「生活史」の脈絡において読むという１つの作業案です。以下の「『往復書簡』から1940年代を読み直す」はその１つの試みです。瞠目すべき２つの自伝研究をもとにして，即ちウタ・ゲルハルトによるタルコット・パーソンズのIntellectual Biography研究とヘルムート・ワーグナーによるアルフレッド・シュッツのIntellectual Biography研究[注]を頼りにして２人の「生活史」を調べる，２人の「精神の生活歴」を調べることです。

注　参考までにワーグナーによるアルフレッド・シュッツの生活史の時期区分を記す。ここでは３つの時期の

うち最後の時期が問題になってくる。

1. 1899-1932　Viena /　2.1933-1938　Viena and Paris /　3.New York 1939-1959

パーソンズは1901年に生まれ1979年に亡くなりますが，ゲルハルトは，パーソンズの生涯には『社会的行為の構造』が成立するまでの第１期（1937まで）と「ナチズムのパーソンズの社会学」［Parsons sociology of national socialism］の第２期（1938年～45年）とが区別されると主張します。1940年という時期にパーソンズは何をしていたかについて有意義なたくさんのインフォメーションをゲルハルトの研究から得ることができます。

パーソンズ評価にかかわってゲルハルトのもっとも注目すべき発言は，かれが「民主主義擁護の学者の生涯」を送ったとしている点です。民主主義というより「アメリカン・デモクラシー」といった方がより適切でしょう。パーソンズは「アメリカン・デモクラシーのために闘った社会学者」であったということです。一方のアルフレッド・シュッツの場合はどうでしょうか。『シュッツ＝グールヴィッチ往復書簡1939年～59年』の英訳者エヴァンス［J.Claude Evans］はこの往復書簡に*Philosophers in Exile*という標題名を与えました。シュッツは一言でいえば「亡命の哲学者」でした。これでアメリカン・デモクラシーを代表する社会学者の「生活史における第２期」と１人の「亡命の哲学者」の生活史のある時期とが重なり合い，互いに「出会い，文通する」行きがかりがみえてくるようなのです。

３－１－２　暗渠としての生活世界の問題

「理論」というものを私たちは１つの平面（次元）でとらえますが，理論という平面の背後には生活世界，草むら，奥行きがある。近代科学の制度化が進むなかで生活世界への科学理論の「着床」という考えに行き着いたのはエドムント・フッサールでした。晩年のフッサール［細谷恒夫訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社］が主張した「背後にある生活世界を問い返す」［Rückfrage von der vorgegebenen Lebenswelt］という考え方であり，それはまたアルフレッド・シュッツによるマックス・ヴェーバーの理解社会学の哲学的基礎づけの試みでもありました。

理論は決して純粋なものではない。「純粋だ」という理論（定式化された命題の体系）の背後には言及されざる「前提」としての，「〈アノニム〉にとどまっている主観的現象の領域」としての「生活世界」，もっといえば一種の「心の習慣」の世界が横たわっている。わたくしもつくづくとこの頃そう思います。

しかるにタルコット・パーソンズですが，この社会学者の科学論（ヴィッセンシャフツレーレ）は終生カンティアン［カント主義者］の哲学に依拠するものでした。パーソンズはマックス・ウェーバーと同じように，カント的な能動的悟性（悟性図式）と受動的感性の二分法，主体・客体のパラレリズムの考え方に忠実でした。１つの理論があってはじめてそこから混沌とした現実が照らしだされるという考え方です。概念構成主義とも呼ばれます。例えば，シュッツとの論争を振り返った「35年後（1974年）の回想」のなかでパーソンズは「1940年代初期から・・・カント的見地と呼ばれるものを，わたくしは変わらない確信をもっていまも信奉している」［邦訳236頁］と明言しています。

２人の議論の違いはどこからくるのでしょうか。その「潜在的な」要因の１つとして２人の生活体験の沈殿・集積の問題,「暗渠としての生活世界」についてここで注目してみます。

マンホールのなかには無数の地下道が張りめぐらされています。それが地上の都市生活を快適にします。シテイ・ライフを楽しむとき，わたくしたちは都市の「表層の明るい」局域に注目しますが，実はその明るいゲシュタルト空間の背後には地下の道という「暗渠」があります。社会理論を学ぶ場合にも，同じようなスタンスをとることが必要ではないでしょうか。社会理論の「暗渠」をみつめるということです。

３－１－３　シュッツ＝パーソンズ論争

ランドマークＣ）およびＤ）として示した２つの往復書簡を並べて読んでいきますと，そこから学ぶことがいくつかでてきます。周知のように，シュッツ＝パーソンズ論争はタルコット・パーソンズの大著 *SSA* に関するシュッツの長文のコメントをめぐって展開されました。その論争はしかし実に呆気ない，後味の悪い結果に終わります。1940年の晩秋に始まり翌年の春の間に５通の手紙をおたがいに交換しあい，何の問題の解決をみないままに中断してしまいました。

どうして２人の論争はすれ違いにおわってしまったのか。その理由が1940年代初頭に書かれた上記の２つの往復書簡を読みくらべていくとすこし見えてきます。さらに２人のBiographyを参考にし，1940年代のシュッツとパーソンズの生活の「草むら」にも研究のサーチライトをあてると，いっそうその理由がみえてきます。レジュメには「シュッツ＝パーソンズ論争」の概略図を示してみました[注]。

詳しい説明は省略しますが，結論をかいつまんで申します。パーソンズの『社会的行為の構造』に対するシュッツのコメントに，パーソンズは「あなたの議論のなかにわたくしの立場を揺るがすようなものを見出せません」「現象学的分析に懐疑的であることをわたくしは告白しなければなりません」と全面拒否の返事を寄せてきたのです。書簡のやり取りを改めてわたくしは読み返してみましたが，パーソンズはシュッツの考え方を実に執拗に１つ１つぬり潰しています。シュッツは大いに困惑し，つぎの譬えをもって手紙のやり取りを中断してしまいます。

> 「リヒャルト・ワーグナーがベートーベンについて語っている逸話をもって終わることにします。あるイギリスの貴族がベートベンに自分の作曲の１つを示して，その楽譜のうちベートベンの気に入らない楽節に十字のしるしをつけてくれませんかと頼みました。ベートーベンはその原稿を全体にわたって克明に十字で塗りつぶしてそれにカヴァーをつけてこの貴族のもとに送り返しました。あなたはこれとまったく同じことをわたくしの論文について行ったとおもいます・・・」［邦訳221頁］

シュッツとパーソンズの間の１つの係争点は「科学者の行為理論の世界」と「行為者の主観的な意味の世界」というリアリテイ構成に関わる微妙な差異化と識別の問題にあります。シュッツはパーソンズに書いています。「あなたがおっしゃるように主観的な見地，行為者の見地に立つというのはわたくしも賛成です」と。イギリスのアルフレッド・マーシャルの経済学，ドイツのマックス・

注　レジュメとして配布した際の失敗に終わったシュッツの「パーソンズ解釈」は以下のようである。

「もっと一般的な見方に到達するためには、あなたの理論を徹底させて、さらに数歩前進させねばなりません」（シュッツからパーソンズ宛の書簡1941.2.10から）「ベートーベンはその原稿を全体にわたって克明に塗りつぶした」（同上）

［A］パーソンズの主意主義的行為論

事実とはある「概念図式」内での現象についての「言明」である
以下のA,B,C,Dは「単位行為」の基本的概念図式

単位行為：	A目的	B状況（手段と条件）	C行為者	D規範

行為の経過を方向づける
未来の出来事の状態

規範:望ましい行為の経過についての言葉による記述

行為の主観的要素Ａ，Ｂ ⟺ 主意主義 ⟺

目的・手段の媒介
目的のランダムネスの排除:選択
規準：究極的価値

［B］シュッツの論点

① パーソンズの具体的レヴェルと分析的レヴェルとの区別
② 行為の主意主義的理論と行為者の側での科学的知識の問題（･･･αβ参照）
③ 「動機」の問題（・・・「規範」要素と「動機の構造」）
④ 単位行為とその限界（･･･Verhalten/Handeln/Handlung；αとβの関係）
⑤ 類型と現実
⑥ 社会生活と社会理論*

「『価値』や『科学』をあなたの体系に、アリストテレスの言葉を用いればθυραθεν＜外から＞ドアを叩いて取り入れることを許容する場合に限って・・・」（邦訳219頁）

α	主観的見地	A知りうる	Bすでに「企図された目的」の達成	C個別的人間
	[行為者の見地からみえる現象]		に関わる知識・経験のストック（手段・条件）	エゴ（客観的）＜わたくしそのもの＞
	HANDELN	内　部	地　平	Umzu-motiv / Weimotif

β	客観的見地	A知り得ない	B 知り得ない	C人間の機能的側面
	行為の科学的観察者の見地	遂行された行動出来事の状態	条件とは行為者が制御できない状況の要素 手段とは行為者が制御できる状況の要素	観察者による自我の社会的場面で装われる役割の担い手 類型化された個人 観察された他我の部分エゴ（客観的）
	VERHALTEN	外　部	地　平	

- ①社会科学の一般理論は単位行為の分析と社会的行為の構造の理論に基礎づけられねばならないこと、
- ②これは主観的見地にもとづくものであること・・・以上は一致点
- ③主観的見地に関する分析は不十分である・・・・・以下は不一致
- ④行為と相互行為についての社会的カテゴリー、「他我」問題、他者理解の問題が欠落している、
- ⑤時間意識、行為と企図と達成行為、人格と匿名性の諸範疇の無視、
- ⑥参与者と社会的世界にたいしてとる社会科学者の特殊な態度の問題の無視
- ⑦価値理論の不十分性（価値自由性）・・・」219頁

＊社会生活と社会理論・・・ ⑥

主観的公準の要請と一致するモデル構成
レリヴァンスの公準　　適合性の公準　　論理的一貫性の公準

SL　社会生活
（第一次意味構成）
SL ➲ ST
動機の理論
シュッツ
⇕
行為者のプラグマテックな日常経験のストック
共時世界の「類型化」
類型的行為者
類型的手段
類型的状況
⇕
＜わたくし＞の「社会的世界の（一次的）意味構成」
自然的態度の構成現象学

⟺

ST 社会理論
（第二次意味構成）
SL ➲ ST
主意主義的行為者の理論
パーソンズ
⇕
観察者の科学的「概念図式」による行為者の主観的意味世界の二次的構成

ああーあまりにもカント的な！！！

ウェーバーの社会学，フランスのデュルケームの社会学，イタリアのパレートの社会学を順次考察して，パーソンズは「主意主義的行為の理論」を提唱したのですが，シュッツはパーソンズの提案する主意主義的行為の理論について「異を唱えているのではありません」「問題はあなたの行為の準拠枠にあります」「このような行為の準拠枠に属する要素のうちどの要素が実際の行為者のこころのなかにあるカテゴリーであり，従って厳密な意味で主観的であるのか，どの要素が観察者の適切な解釈図式にすぎず，従って客観的であるのかにあります」「この点に関する限り，思うに，あなたの考察はハーフウェーにとどまっています」「わたくしがいいたかったことは，わたくしの理論が終わったところで，あなたの理論が始まるということです」。

セーヌ河――賀茂川でもいいのですが（笑い）――をのぼるのとくだるとでは景色が違ってみえます。このベルクソンの比喩が以上のシュッツ＝パーソンズ問題の核心をついているかどうか，適当かどうか，にわかには判断がつきません。しかしわたくしたちは「理論の実践」に携わり，同時に「社会生活の実践」にも携わるわけですから，一個同一の現実にたいする「行為の理論」vs「行為者の見地」あるいはもっと広く「社会理論」vs「社会生活」というアプローチの差異化と弁別は十分に考えられうることです。セーヌ河という一個同一の世界を上ったり下ったりしながら経験するように。「シュッツ＝パーソンズ論争」は行為理論の世界から行為者の見地へと下ってくるパーソンズのアプローチと，行為者の見地から行為の理論へと上がっていくシュッツのアプローチとが「中間の地点」で出会って「行為」とはいかなる現実かについて議論しあってしている。わたくしの意見ですが，そこのところで２人の見解がかみ合わないまま議論が中断してしまったのです。

３－２　傷を受けた者と外科医

同じ時期の往復書簡として『シュッツ＝グールヴィッチ往復書簡』［ランドマークD）以下*SGC*と略記する］が存在することは既述のとおりです。*SGC*を以上の『シュッツ＝パーソンズ往復書簡』［以下*SPC*と略記する］と突き合わせてみますと，びっくりするような事実に逢着します。どちらか一方の往復書簡にのみ関心をとどめるかぎり多分気づかないであろう事態，２つの往復書簡を較べてみてはじめて気づくような事態です。それはパーソンズ宛に書いた昨日の手紙の「論理的意味構築」［logical construction］の世界とグールヴィッチ宛に書いた今日の手紙の「神話的意味構築」［mytho-logical construction］の世界とのシュッツにおける併存・両立という現実です。

事態を本当に理解する方途はGOING BACKすることだ，という定石にしたがってこの「異質な意味世界」の同時存在の問題にアプローチするとしますと，第２次世界大戦の最中にあるパーソンズ，グールヴィッチ，シュッツという３人のおかれている状況の違いが明らかになってきます。同じ時代であってもその時代の流れによって傷を受けた者と「この傷は悪い傷だからきれいに切開してしまおう」という立場の者，外科医と傷病者の間では現実体験は異なるのではないでしょうか。当たり前の話といえば当たり前の話なのですが，社会理論論争では意外に「灯台下暗し」なのです。

一方の論争の当事者であるアルフレッド・シュッツの1940年代初頭における生活実態について手がかりを得るために*SGC*のなかから，１通の手紙をピック・アップしてみます。

３－２－１　シュッツの手紙

拝啓，グールヴィッチ様，20日付のお便りありがとうございました・・・このいやな時代にはあらゆる価値があべこべの記号を身につけてしまっています。春は攻撃に対する前書きとなり，月の光に関心をもつのはもはや恋人や詩人でなく夜間爆撃です。オリュムポスの山は神々の不在の権化となってしまいました。昔のテレモフィレの戦いやテーベに対する勝利の戦の神話が蘇り，ステュムパリデスの怪鳥がガサガサと羽音を立ててはすべての食料を汚濁したり，その鋼鉄の両翼によってあらゆる人間的なものを押し殺しています。／この世の廃墟から現象学── philosohia aere perennius［永遠の第１哲学］──が救済されると信じておられるだけでもあなたは相変わらずの楽天家です。私はもはやそれを信じません。ブッシュマンたちは恐らく先ず国家社会主義（ナチ）の思想財に習熟しなければならないでしょう。このことは私たちが生きてきたように，私たちが朽ち果てることを妨げません。またそれ故に私たちの世界のうちに，私たちの世界に欠いてはならない秩序を創り出すように私たちは努力しなければなりません。この力点の移動のうちにすべての抗争――私たちの見解の間の抗争もまた──が秘匿されています」［邦訳111頁］

シュッツからグールヴィッチへ宛てた1941年４月26日の手紙です。この手紙の注目すべき第１の点はSPCにおけるパーソンズ宛の最後のシュッツの手紙，「理論は対話の貧弱な代替品にすぎません」という1941年4月21日の手紙とほぼ同時期に書かれている点です。５日しか日付が違っていない──ベートーベンの譬え話の手紙［41･3･27］から１ヶ月後です。

もう１つ注目したい点があります。「ナチズム問題」に対するシュッツの表現の仕方です。ナチの記述は，「オリュンポスの山は神々の不在の権化」「鋼鉄の両翼」「ステュムパリデスの怪鳥」「テレモフィレの戦い」「テーベに対する勝利の戦の神話」などのように，象徴的・神話的表現によって出来事が叙述されています。出来事を論理的経験的記述によって組み立てる「社会学的」概念世界として表象されていません。

*SGC*全体で200通の手紙があります。目下わたくしはその内容を分類しその特徴を調べています。手紙文の内容を「生活史」の領域と「学問論」の領域に仕分けし，それぞれの領域ごとに主なアイテムを確定してそれぞれの使用頻度をパソコンで調べていきますと，ある特徴が見えてきます。例えばNationalsozialismus［国家社会主義，ナチス］というアイテムがどれだけの頻度で登場するか調べますと，全体の200通の手紙のなかでたった１回限り。上に引用した「国家社会主義の思想財をブッシュマンが学習するであろう」の１度限りです。日常生活のルーティン化した表現を一切避けています。

第３の特徴ですが，手紙は明確な「価値評価」によって彩色づけられていることです。「あらゆる価値があべこべの記号を身につけている」「私はそれを信じない」など価値の順序がはっきりしているし，いやなことはいやだとはっきり表明されています。

第４に，あれかこれかの二者択一。「私たちの世界」かそれとも「彼らの（神話的）世界」かという「非妥協的な信念」のマニフェスト。「私たちが生きてきたように，私たちは朽ち果てようということ」「私たちの世界のうちに私たちの世界に欠いてはならない秩序を創り出す」。シュッツは科学理論の「価値中立」を主張しますが，だからといって「生活者」としての態度を曖昧模糊にしたということでは決してなかったということです。

第５に「親密な世界」へのまなざしがシュッツのこの手紙には一切存在しません。現象学すら「無意味」なのです。ニヒルな世界のみが異様に強烈に対自化されていることがわかります。「獣」が私たちの生命，家族，友人にまとわりつき，介入し，錯乱し破壊する。「あらゆる価値」に「あべこべの記号」をつけ，私たちの世界を「この世の廃墟」と化す，否定的な意味での「重要な他者」としての国家社会主義への全身的凝視がはっきりと示されています。1939年８月19日のグールヴィッチ宛のシュッツの手紙にも同じ関心が表出されています。

> ところですべてこれは，権力を与えられた獣が，再び諸王たちをその前で無理矢理屈従させるのではないかという問題に比すれば，２の次の問題です。親愛なる友，フィラレート君，私たちに与えられている時間を大いに活用しましょう。そして，願わくば野蛮人が私たちの輪を掻き乱さないように，そのように事柄がうまく運ぶようにと願いましょう。私はこの手紙に是非テオフィルと署名したいのですが――神義論の終章にもかかわらず自分にはそうすることが出来ません――そこで私は暖かい握手と最愛の奥様のお手の上への口づけにのみとどめます。あなたのパングロス［邦訳75頁］

「ナチ」ということばをシュッツは何故に直截に用いなかったのでしょうか。これは翻訳以来心中に蟠っている疑問の１つです。１つの解釈ですが，たとえばフランツ・ノエマンのナチズム研究には「ビヒモス」という旧約聖書［『ヨブ記』第40章第15節以下］に出てくる怪獣[河馬]が書物のタイトルに用いられています。砂漠に住んでいるビヒモス［ベヘェモット］は混沌，混乱と無秩序を意味します。「神話」的言説が賦活するのはいつもひとびとが法外に異常な時・ところ・出来事との出会いにおいてであるということは注目に値します。Ｅ・カッシーラーの『シンボル形式の哲学』第２部「神話的思考」には，神話は「印象のカオス」から生れる１つの表現形式であるということばがあります。アッと思うような異常な出来事に出会うとき，わたくしたちは言葉を失い，呆然自失します。日常用語の表現機能が停止するわけです。そのような異常な印象のカオスの変身（メタモルフォーゼ）がカッシーラーによれば「神話」的対象化です。「怪獣」「ステュムパリデス」などは，出来事の体験者の「印象のカオス」のまさしくメタモルフォーゼにちがいありません。

手紙の文面に「神話」的表現が頻発すること，いうまでもなく，それは書き手が通常の「概念」的表現「Ｓはｐである」による対象の定義づけの手法を端的に拒否していることを意味します。ナチス問題はシュッツにとって「それと名指す」ことを憚る，緊迫した「感情複合」（体験）問題であったことがわかります――*SGC*では「ニヒリズム問題」（グールヴィッチ）としてナチス問題は論議されています――。「ナチス」の語が手紙の文面に欠落する理由は関心が過小であったからではなく，反対に圧倒的に過大であったからです。

以上は1940年代におけるシュッツの「精神の生活史」の一端を述べたにすぎません。「神話的表現」の問題をここで取り上げた理由をもっとはっきりとさせなければなりません。1940年代のパーソンズの生活史との対比によってこの理由はさらに明らかになるはずです。話題を変えます。

３－２－２　パーソンズと「ナチの社会学」

1940年代のパーソンズの場合はどうであったでしょうか。この点についてわたくしはこれまで全

くの無知状態でした。パーソンズが第２次世界大戦中に何をしていたか，パーソンズの社会学を学生時代から40年も学びながら，これを調べもしなかったということです。2002 年タルコット・パーソンズの「精神の歩み」*An Intellectual Biography*［ランドマークＦ)］を読みました。ハイデルベルグでお会いしたゲルハルト女史の書いた本です。読んでびっくりしました。目から鱗が・・・ということです。パーソンズの生涯を実に詳細にたどっています。

1938年～45年の７年間をゲルハルトは「パーソンズのナチ社会学の時代」であると特徴づけています。ヨーロッパ留学からアメリカに戻り，その成果を『社会的行為の構造』（1937年）としてまとめた翌年からの７年間の精神の足跡は「ナチ社会学の時代」として特徴づけることが出来るということです。

次のようなことが書かれています：

> 1938年11月９日の「ユダヤ人大虐殺」からナチスの敗北と第２次世界大戦の終わりまでパーソンズはアンチナチズムを宣伝する政治的アクティヴィスト（能動主義者）として公然と活躍した。1938年早々にパーソンズはラドクリフ・カレジ学生新聞‘*Radcliffe News*’に「ナチスは学習を破壊し，宗教に挑戦する」というタイトルの記事を公表した。以来1938年と1945年の間にパーソンズは国家社会主義に関する論文を続々と発表（論文９篇，生前未発表の草稿３篇）した。またラジオ放送，講演などいろいろの機会や集まりに参加して話した。これらはハーバード・アーカイブに残されている。1941年，パーソンズはアメリカ国防ハーバード・グループの座長に選ばれた。これは全体主義に反対して民主主義のスキルを提供するオペレーション・グループであり，目的はドイツの社会構造に関する討議集団を組織してナチス・ドイツに関する社会科学の諸知識を糾合し，これによってアメリカの対ドイツ政策ならびに戦後のドイツ復興計画に有効な手だてを準備することにあった。1941年，秋，パーソンズはハーバード・グループの「道徳ならびに国家の統一委員会」設置のために設立案文を起草した。曰わく，「ドイツ国家社会主義は原則的に現代の自由主義的国家と両立不可能であるばかりでなく，いまやその存続そのものに対して直接的で重大な脅威となっている」。だからこそ戦わなければならないと。［以上はUta Gerhardt, *Talcott Parsons, An Intellectual Biography*, pp.58-129の部分要約である］

タルコット・パーソンズはシュッツとの往復書簡の相前後する時期に「現代の反ユダヤ主義社会学」，「ナチ以前のドイツにおける民主主義と社会構造」などの論文を執筆したり，アメリカ東部社会学会会長（1942年）の要職を務め「ファシスト運動のいくつかの社会学的側面」というタイトルの会長講演を行っています。

パーソンズは，このように第２次世界大戦中旗幟鮮明にして自分の果たす「仕事」を使命として受け取り，これを実践しました。パーソンズは「社会の病」を切開する社会(サ)の外科医(ジョン)の職務を率先励行したということです。アメリカ社会の「外科手術」の教則本となったものがとりもなおさず1937年にパーソンズが執筆した著作『社会的行為の構造』でした。

この本の特徴は「主意主義的行為」の理論にあります。主意主義(ヴォランタリズム)が人間の社会的な環境をつくっていく中心をなすという理論ですが，その中心概念は「行為」にあります。その最小単位がunit actと名づけられます。ある状況の中におかれた行為者の行為のことです。目的を遂行するために，状況のなかから可能な手段を選びとって，目的と手段の関係を徹底して合理化する。目的と手段の間を決定するのは「規範」です。「『規範』や価値が行為の最も重要な要素だ」と彼は強調します[注]。

注　シュッツはパーソンズに宛てた手紙のなかで皮肉って書いています。「もし規範や価値や『科学』をあなたの体系に，アリストテレスの言葉を用いるとすれば，外から『ドアをたたいて』取り入れることを許容する場合にかぎって，承認することが出来ます」と。行為の準拠枠の価値や規範は一体どこから来るのだという問いかけをしています。［*SPC* ;1941.3.17 邦訳219頁］

パーソンズによる「主意主義の行為理論」の特徴のひとつは，「規範」や「価値」を行為の構成要素の１つとしてアプリオリに設定していることです。規範の発生論的・批判的分析は判断停止される。ある種の価値前提，即ちアングロサクソンのピューリタニズム，清教徒主義の価値前提への強いコミットメントがあります。ピューリタン的な発想がパーソンズの価値意識の奥底で微動ともせずに存在しているということです。もしかすると現代の代表的アメリカ人も同じような考え方ではないでしょうか？いわゆるWASPとよばれるアングロサクソン系プロテスタントの支配階級のアメリカ人の「こころの習慣」の問題です。パーソンズは勿論アメリカ社会の中にさまざまな複雑な不平等や矛盾があることを承知しています。しかし最終的にはこの価値前提に戻ってきます。世俗的行為の最終的正当化の根拠を「聖書」におくという振舞です。

1937年に刊行されたパーソンズの『社会的行為の構造』の考え方は時代状況にまさにぴったりでした。行為者が状況に「主意主義的」に活動するためののオリエンテーションの図式，目的と手段の間を媒介する「規範」の役割の重要性の指摘。この「主意主義的行為論」の教則本にしたがって「ナチ以前のドイツ社会」に伏在する「反民主主義的」価値パターンの一覧表があぶり出される。ドイツ社会の研究にさいして国内の経済的な社会的な生活チャンスの不平等とか，ヴェルサイユ体制下のドイツの負債借款とか経済的な危機等について説明がありますが，最終的にはナチ・ドイツの文化の特徴，ナチスはどのような「連帯と価値統合」によって成り立っているかの問題に焦点があてられます。「国家社会主義」「封建主義」「形式主義」「権威主義」「ユンカー的家父長主義」「軍国主義」「原理主義」「ロマンチシズム」「コミュニズム」「反ユダヤ主義」など，論文が進むたびにこのような抽象的な社会科学的な概念の行進が目の前に秩序だって現れてきます。さまざまな規範や価値の一覧との対比において「アングロサクソン的」な民主主義を支える究極的価値としての「清教徒的キリスト教的実践価値哲学」が熱っぽく浮きぼりされてくるわけです。わたくしも気持ちが高揚してしまって真っ赤になって「しゃべって」いるのではないかと思いますが（笑い）。

1940年代はじめのパーソンズはこのような状況にあったのだということがわかって，わたくしは目からウロコが落ちました。「ああ，そうだったのか。なるほどな」と。

３－２－３　状況のなかの「シュッツ＝パーソンズ」論争

ウタ・ゲルハルト女史の仕事から多くのことを学んだ今，次にやるべき仕事が少しずつ見えてきたように思います。1940年10月30日シュッツはパーソンズから「あなたに発表をお願いできませんか」というバーハード大学「合理性」研究会への招待状を受けとったわけです。シュッツは1937年のパーソンズの著書［ランドマークＢ)］を読んでいましたし，亡命以前にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの編集者Ｆ・Ａ・ハイエクからこの著書の書評原稿の依頼［ランドマークＣ）邦訳

41頁参照］もあったわけです。シュッツのパーソンズ『社会的行為の構造』書評と往復書簡にはこうした背景があったということです。

シュンペーターとの共同主宰によるパーソンズのハーバード「合理性」研究会ですが，この研究会は純粋学術的な討議をもっぱら目的にした研究会であったとは考えにくい。むしろパーソンズはこの研究会をはっきりと実践的関心に基づく「組織されたアクションプログラム」として位置づけていたという気がします。というのはパーソンズはこの時期にシュッツばかりでなく，シュッツの友だちヴェーゲリン［Eric Voegelin 1901-1985］とかウィーンから亡命してきた哲学者たちにも手紙を書いている。「アラバマ大学のヴェーゲリン博士」という言葉がSPCにも出てきます。ヴェーゲリンはシュッツの子どもの頃からの幼友達でした。反ユダヤ主義の問題についてヴェーゲリンもパーソンズと議論しています。相当長い論文です。注目しなければならないものです。

以上はパーソンズの1940年代はじめのころの「生活史」的事実のささやかな確認点です。問題と思われる点をもっぱら「理念型」的にピックアップにしたにすぎません。しかしこの２人の人物は同じ年代のアメリカの戦時体制下の状況におかれながら，何かちょっと違っているなという印象を，皆さんお受けになったのではないでしょうか。それが重要な論点であろうとわたくしは思うのです。パーソンズ＝シュッツ論争についてこの点をふまえてもう一度考えなおして見なければならいと。

２人の論争の特徴は，パーソンズに宛てたシュッツの５通の手紙がパーソンズの焦眉の問題である「ナチズム問題」から，知ってか知らずか，すべて偏倚しており，それとは全く別種類の，しかしシュッツにとっては極めて重要な問題を掲げて，パーソンズの「合理性」問題にチャレンジしているということです。まるでボタンの掛け違いのような手紙の交換です。クルト・ヴォルフは「耳の不自由なもの同士の会話」と表現したのですが。

ボタンの掛け違いを元に戻すためには「社会科学による人間の行為の研究」――パーソンズの「主意主義的行為論」はそのようなタイプの研究です――それと「生活の中で自然（ナチュラル）におこなわれている日常人の行為の常識的理解」との関係について，もっと注意深く検討してみる必要があるということです。この反省こそ実は「方法論（ヴィッセンシャフツレーレ）」とよばれる社会（科）学の哲学的基礎づけのシュッツ問題にほかなりません。

【４】結びにかえて：現代とパーソンズ＝シュッツの問題

社会科学の方法論の基本課題は「社会生活」と「社会理論」の相互関係についてしっかり反省することにあります。*SPC*を読んでみるとこの問題への接近には２つの通路があることに気づきます。１つはパーソンズ的問題解決，「社会理論から社会生活へ」の途です。上から下への道筋をたどることです。これは「社会的現実」と「理論的世界」との関係をドイツの伝統的なカント哲学を背景にして反省する見方です。マックス・ウェーバーもこの系列に入ります。カント的認識論の立場です。

シュッツの方はこれとは逆の道をたどっています。すでに述べましたが，パーソンズとの手紙の交換とほぼ同じ時期にシュッツはグールヴィッチと手紙を交換しています。グールヴィッチとシュ

ッツの２人はヨーロッパからアメリカ合衆国に亡命するとすぐに国際現象学会の設立ならびに機関誌*Philosophy and Phenomenological Research*の創刊の仕事に加わりました［1939年12月，ニュースクール・フォア・ソーシャルリサーチにおいて24名の創設委員が名を連ねている。内訳は北アメリカ人14，ドイツまたはオーストリアの亡命者７，ヨーロッパ人３である: H. R. Wagner,P.79から］

シュッツはまたフッサールによる1935年のウィーン講演「ヨーロッパ的人間の危機における哲学」や同年のプラハ講演――のちに『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』として後に刊行されますが――などの講筵に列したほかに，「1937年のクリスマスまで毎年３度か４度フッサールに面会するように努めた」［H. R. Wagner,P.47］といいます。これらの講演のなかでフッサールは「生活世界（レーベンスヴェルト）」概念をはじめてその学説の前面に押し出したのです。フッサール78歳の時です。シュッツは仕事――周知のように彼は終生「昼は銀行家，夜は現象学者」の２足の草鞋を履きました――の合間をみてはフッサールの現象学の最後の局面に多大の関心を寄せたのでした。

晩年のフッサールの現象学の一番重要な点は，カントの超越論的哲学をデカルトに次ぐ第２の哲学の転回点として位置づけカントを高く評価しながら，カント以後の第３の転回点として現象学を位置づけることです。フッサールはカントの哲学上の考え方をしっかりと把握しこれを克服しない限り，現代のヨーロッパ哲学ならびに生活の危機をのり超えることはできないことを示したのです。

数学，物理学という自然科学の光で証明される因果の方程式の世界の背後には，「暗渠」ともいうべき日常生活の深い経験の茂みが横たわっている。このことに配意しない限り，それがどのようであるかをしっかり把握しない，人間（社会）科学の議論はいつもベールを被っているような「中途半端」な議論に終始してしまうということです。

ウェーバーとパーソンズはカントの科学論によって基礎づけられた社会（科）学論です。アルフレッド・シュッツの場合は，カントそしてウェーバーの到達点をふまえ，エドムント・フッサールの科学論――生活世界論の展開――にまで踏み込む形で「社会生活」と「社会理論」の間の関係性を改めて追求しています。この科学論の分岐点はどこにあるのでしょうか。

１つには――いましがた指摘しましたが――シュッツとパーソンズの間の「状況の定義づけ」の問題があると思います。第２次世界大戦の最中アメリカで生活をする「亡命者として生活する視点」の問題と「時代の病を切り取る外科医」の視点という状況の定義づけの問題です。

２つには，この問題と密接につながりますが，「外部」から行為者を観察する「社会科学」の準拠枠の問題と行為者自身の「生活経験」の準拠枠との間の「乖離」の問題です。ヴェーバーとパーソンズの科学論は，この乖離の存在を「意識していない」，というよりもこの乖離を問題として定立する認識批判のフレームを準備しえなかったということです。なぜなら社会的現実はカント的科学論では「混沌として認識不能」であるからです。パーソンズは科学者の見地と行為者の見地とが一致する準拠枠「観察者はいかにして行為者を理解できるか」の問いをもっぱら循環するのです。当事者の苦しみと悩みの世界を「生活世界」の理説（「こころの習慣」）の問題として置き換えるならば，この現実を「複雑で認識不能な世界」として置き去りにするわけにはいかないでしょう。フッサール＝シュッツの現象学的社会学の新しい転換点は，この「複雑で認識不能な世界」のうちに「科学

的認識の基礎」を見出したことです。カント的知の出発点を逆転させたということです。

「ボタンの掛け違い」問題をさらに詳しく説明する時間の余裕はなくなりました。ひとこと申し添えます。シュッツの提言はパーソンズばかりでなく哲学者の故廣松渉さん等によっても誤解されています。社会科学の分野の多くの人々にも十分に理解されないままにとどまっているのではないでしょうか。ともかく今日のはなしによって社会科学の科学論の第３のWendepunktの論点はいくらか明らかになったと思います。「生活世界」にはドクサ以上の「理説（サンス・コマン）」が横たわっています。

グローバリゼーションがますます進展する２１世紀の世界では「生活世界」と「社会理論」の相互連関を射程に入れた「科学論」のいっそうの展開をはからないかぎり，決して「ヘゲモニーをめぐる社会秩序」の平和的解決はあり得ないでしょう。世俗の争いごとに「神の御加護」（「究極的価値」）を口にすることは避けなければならいということです。複数の「生活世界」の無政府化を結果するからです。

長い時間，ありがとうございました。立命館大学の在職19年間で一番有難かったことはやはり「自由」とインフォーマルな「助け合い」の気風です。そして何といっても「在外研修」に恵まれ，わが内なる「井のなかの蛙」の精神を払拭できるチャンスに恵まれたことでした。立命館に招かれることがなかったら，多分このような話はできなかったと思います。今後も別の形で皆さんの輪のなかに入れていただいて微力を尽くしたいとおもいます。

教職員の皆さんにはお世話になりました。卒業生の皆さんには多忙のところ本当に有り難う。在学生の皆さん，明日から試験でしょう。長時間話を聴いて下さってどうもありがとう。これで終わりたいと思います。

佐藤　嘉一教授　略歴と業績

１．略　　歴

1938年２月12日	福島県郡山市に生まれる
1956年３月	福島県立安積高等学校卒業
1960年３月	東北大学文学部哲学科（社会学）卒業
1962年３月	東北大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程修了
1965年３月	東北大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程 単位取得満期退学
1965年４月～67年１月	東北大学助手（文学部）
1967年２月～71年９月	金沢大学講師（法文学部）
1971年10月～84年３月	金沢大学助教授（法文学部）
1974年４月～84年３月	金沢大学大学院文学研究科担当
1984年４月	立命館大学教授（産業社会学部）
2003年３月	学校法人立命館定年退職
2003年４月１日	立命館大学特別任用教授，名誉教授

立命館大学学内歴

1987年４月～1988年３月	産業社会学部主事
1993年４月～1995年３月	産業社会学部長
1995年４月～1997年３月	大学協議会委員
1998年４月～2000年３月	総合情報センター副センター長（学術情報担当）
1998年４月～1999年３月	産業社会学部奨学基金募金委員
1999年４月～2002年７月	学校法人立命館評議員
2000年４月～2001年３月	学校法人立命館評議員副議長
2002年４月～現在に至る	人間科学研究所長

学会活動

関西社会学会会員

日本現象学・社会科学会会員

日本社会学史学会会員

２．研究業績

著　書

共著「現代と官僚制」：東北社会学研究会編『社会学』pp.130-139　誠信書房　1968

共著「行為と人間」：二宮・戸谷編『現代社会学の人間的考察』pp.7-24　アカデミア出版会 1977

共著「カリスマと官僚制」：森・矢澤編『官僚制の支配』pp.55-79　有斐閣　1981

共著「抑圧と自由」：家坂編『現代社会学における人間の問題』学文社　1982

共著「アルフレッド・シュッツの理論」：新明・鈴木編『現代社会学のエッセンス』ペリカン社　1996

共著「自己理解と他者理解」：佐藤・細谷昂・村中編『リーディングス日本の社会学２／社会学思想』pp.279-287　東京大学出版会　1997

共著「戦後五十年と日本文化の諸相」：末川・宮本・山口・坂野編『戦後五十年をどうみるか』（下）人文書院　1998

共著Eine phänomenologische Untersuchung des Ong(Dankbarkeit); Ilja Srubar ＆ Steven Vaitkus(Hrsg.) *Phänomenologie und soziale Wirklichkeit Entwicklung und Arbeitswesen*, S.189-196 Leske+Budrich Opladen, 2003

論　文

単著「地域社会研究に関する覚え書き」東北社会学研究会『社会学研究』第23号　pp.101-107 1962

単著「方法論的個人主義の制度分析における問題点」東北社会学研究会『社会学研究』第23号 pp.104-114　1963

単著「理解の論理」東北社会学研究会『社会学研究』第24・25合併号　pp.1-18　1964

単著「マックス・ヴェーバーの『理想型』とその現代的系譜」日本社会学会『社会学評論』第58号　pp.15-30　有斐閣　1965

単著「理解社会学と方法論的個人主義―社会的行為理論の観点から―」『金沢大学法文学部論集』哲学編第15巻　pp.89-110　1966

単著「合理性」概念寸考『金沢大学法文学部論集』哲学編第16巻　pp.83-107　1968

単著「集合行動論序説」『金沢大学法文学部論集』哲学編 第17巻　pp.23-48　1969

単著「マックス・ヴェーバーと社会的行為の理論」『金沢大学法文学部論集』哲学編第19巻 pp.43-70　1971

単著「フランクフルト学派の批判的社会理論」，現代社会学会議『現代社会学３』pp.3-20　講談社　1975

単著「N・ルーマンと社会学的機能主義」『金沢大学法文学部論集』哲学編第23巻　pp.19-54 1975

単著「マックス・ヴェーバーの行為理論と社会学的機能主義」東北社会学研究会『社会学研究』第34号　pp.81-100　1976
単著「性格と社会構造」金沢大学教育開放センター『性格の科学』pp.17-28　1978
単著「自我心理と社会理論―青年M・ヴェーバーの生活史分析による―」『金沢大学法文学部論集』哲学編第26号　pp.1-22　1978
単著「管理社会とナルシシズム」金沢大学教育開放センター『現代の社会病理』pp.137-145 1979
単著「社会的事実の構成―シュッツ＝パーソンズ論争に寄せて」東北社会学研究会『社会学研究』第40号　pp.1-18　1980
単著「自己理解と他者理解―A・シュッツの『社会的世界の意味構成』をめぐって」日本社会学会『社会学評論』第127号　pp.2-17　有斐閣　1981
共著「行動と行為の基礎」（田中・小牧）『金沢大学文学部論集』行動科学科篇　第３号 pp.123-137　1983
単著「N・ルーマンの社会システム論と現代」『立命館産業社会論集』第20巻第４号　pp.49-62 1985
単著「A・シュッツをめぐる二人の哲学者」『立命館産業社会論集』第21巻第３号　pp.1-18 1985
単著「日常経験とシステム理論」日本社会学会『社会学評論』第37巻第１号　pp.35-44　有斐閣　1986
単著「ニクラス・ルーマンのシステム論的社会発展論について」現代社会学研究会『新しい社会学のために』第36号　pp.1-8　1986
単著「日常生活の社会学」序説　立命館大学産業社会学会『さんしゃ』20号　pp.9-17　1987
単著Die Struktur des Ong (Dankbarkeit)『立命館産業社会論集』第26巻第３号　pp.1-15 1990,
単著「ビーレフェルトとマックス・ヴェーバー―『資本主義の〈精神〉』論文の町を旅して―」『立命館産業社会論集』第26巻第３号　PP.1-31　1991
単著「A・シュッツにおける『社会的人格の問題』」東北社会学研究会『社会学研究』第60号 pp.25-44　1993
単著「A．シュッツにおける『他者理解の問題』」立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』30巻３号　pp.47-59　1994
単著「『日常』と異化の問題―現象学的社会学 序説―」『立命館大学産業社会論集』31巻１号 pp.109-130　1995
単著「A．シュッツと現象学―『シュッツ＝グールヴィッチ往復書簡1939-1959』にみる」日本社会学史学会『社会学史研究』７号　pp.37-51　1996
単著「Tomoo Otaka and Alfred Schutz in the 1930s — Their Social Theory and Its Socio-

Cultural Background」立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第35巻第１号 pp.39-55　1999

単著「Phenomenological Sociology in Japan：Past and Present — with Special Reference to Alfred Schutz」立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第35巻第２号　pp.1-21 1999

単著「＜わたくし＞という現象―『社会と個人』問題の一つの展開―」立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第36巻第４号　pp.6　2000

単著「アルフレッド・シュッツにおける『建築の意志』」情報出版『情況』2000年８月号別冊 pp.6-22　2000

単著「民話『赤ずきん』にみるアイデンティティと社会の問題　立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第36巻第２号　pp.23-40　2000

単著「『著者たち自身の伝記』はイデオロギーか」社会学研究会『ソシオロジ』第45巻二号 pp.126-127　行路社　2000

単著「社会科学における『ロビンソン・クルーソー問題』―いわゆる『ロビンソン的人間類型』論をめぐって―」立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第37巻第１号（通巻108号） pp.67-90　2001

「〈わたくし語り〉とドストエフスキー：『未成年』を現象学的社会学の目で読む」立命館人間科学研究所『立命館人間科学研究』第４号　pp.49-76　2002

翻　訳

単著　W・M・スプロンデル編『A・シュッツ　T・パーソンズ往復書簡　社会理論の構成』（木鐸社，1980）

単著　A．シュッツ『社会的世界の意味構成』（木鐸社，第１版第４刷1996）

共著　ジョン・アーリ『経済･市民社会･国家』「３：生産と流通の諸領域」（清野正義他） pp.41-69（法律文化社，1986）

共著　R・グラートホフ「アルフレッド・シュッツの音楽社会学―日常生活の表現とフレームとしての音楽―」（中村正との共訳）『立命館産業社会学論集』第23巻３号　pp.75-111　1987

単著　R・グラートホフ編『亡命の哲学者たち―シュッツ＝グールヴィッチ往復書簡』（木鐸社，1996）

共著『ハーバーマス＝ルーマン論争・批判理論と社会システム理論』（山口・藤沢との共訳）木鐸社　第１版第５刷　2001

単訳著「生きることと学ぶこと」：R・グラートホフ編『シュッツ＝グールヴィッチ往復書簡 1939-1959』あとがき『立命館産業社会論集』第27巻第１号　pp.77-116　1991

調査報告

共同調査「労働組合とホワイトカラーの意識構造―TBC労働組合員のばあい―」（小山・佐藤・八木）東北大学部『文化』第25巻第２号　pp.209-243　1961

共同調査「地方都市における市会議員の活動と住民組織」（家坂・佐藤・高橋・八木）東北大学文学部『日本文化研究所紀要』別巻第一集　pp.48-85　1963

共同調査「米沢買い継商人の精神構造」（家坂・田代・佐藤・守屋・志田・山崎・船津）東北大学文学部『日本文化紀要』別巻第三集　pp.3-16　1965

共同調査「移住と社会的ネットワーク：沖縄県今帰仁村を事例として」中川他との共同執筆，立命館大学人文研究所『人文学科学研究所紀要』No.68［分担「移住（海外・本土）と社会的ネットワーク―郷友会組織と呼寄―」pp.67-111，分担「『復帰』世代の『本土移住』体験」pp.113-192］1997

その他（辞典・書評など）

共同『社会学の基礎知識』の分担執筆（「価値自由」，「理念型」の項目等解説）塩原・松原・大橋編　有斐閣　1969

共同『社会学小辞典』の分担執筆（「理解的方法」「理解社会学」等の項目解説）濱島・竹内・石川編　有斐閣　1976

共同『新社会学辞典』の分担執筆（「マージナル・マン」他）（森岡・塩原・本間編）有斐閣 1993

共同『現象学辞典』の分担執筆「ニュースクール」他７項目執筆：（木田・野家編）弘文堂 1994

共同『社会学文献事典』の分担執筆「Ａ・シュッツ『社会的世界の意味構成』」pp.62-63（見田・上野・内田・佐藤・吉見・大澤編）弘文堂　1998

書評「二つのヴェーバー研究―大塚・安藤・内田・住谷『マックスヴェーバー研究』，大塚編『マックス･ヴェーバー研究』―」日本社会学会『社会学評論』第66巻　pp.108-112　有斐閣 1966

書評：「秋本律郎『ドイツ社会学思想史の形成と展開』」日本社会学会『社会学評論』第106巻 pp.82-85　有斐閣　1977

書評：「厚東洋輔『ヴェーバー社会理論の研究』」日本社会学会『社会学評論』第115巻 pp.90-93　有斐閣　1978

書評：「片桐雅隆『日常生活の構成とシュッツ社会学』」日本社会学会『社会学評論』第34巻第２号　pp.194-197　有斐閣　1982

書評：「西原和久編『現象学的社会学の展開』」日本社会学会『社会学評論』第44巻１号　有斐閣　1993